

発達障害児に関わる保育士・幼稚園教諭の「不安や困りごと」

～ 作業療法士の視点から ～

井上 和博¹, 河内山 奈央子²

要旨 本研究の目的は、発達障害児を統合保育・教育する上で保育士・幼稚園教諭がどのような難しさを感じているのかを明らかにし、発達障害児の地域生活を支援するためには作業療法士としてどのような援助が可能であるかを検討することである。A市11か所の保育園・幼稚園の保育士・幼稚園教諭31名に対して、統合保育・教育の状況と保育・教育する上での不安や困りごとに関するアンケートを実施した。その結果、保育士・幼稚園教諭は『集団適応』と『不適切な行動』に関することで困り感を持っており、これらは保育士・幼稚園教諭が、発達障害児個人の発達や生活に配慮しつつも、集団へのスムーズな適応を妨げる特徴に対して困っているものと考えられた。従って、作業療法士は保育士・幼稚園教諭から集団場面での発達障害児の様子についての情報を収集するとともに、治療的立場から発達障害児の特徴や具体的な集団適応の方法を伝えることが重要であると考えられた。

Key Words : 発達障害児, 統合保育, 困りごと, 集団適応, 不適切な行動

緒言

発達障害は人生の初期の段階で受けた障害が個人の一生にわたってさまざまな能力に重篤な影響を及ぼす場合をいう¹⁾。DSM-IV²⁾では、発達障害は、精神あるいは情緒、行動障害を中心としたものとして、精神遅滞、学習障害、運動能力障害、コミュニケーション障害、広汎性発達障害、注意欠陥および破壊的行動障害を示している。

わが国では、厚生省の1974年通達「障害児保育対策事業実施要綱」以来、保育園や幼稚園の中で、障害のある子ども、障害のない子どもも一緒に保育を受けること（統合保育）が実施されている^{3,4)}。そして、就学までは療育施設で過ごすことの多かった発達障害児が地域の保育園・幼稚園で過ごす機会が多くなってきており、幼児期の発達障害児において、保育園・幼稚園は重要な生活の拠点となっている。

しかし、発達障害児は状況への依存性が高く、保育園・幼稚園という集団場面において上手く能力を発揮できないことがある。そのため発達障害児の地域生活を支援する作業療法士は、発達障害児に対して個別の治療場面だけでなく、保育・教育の場における状況を十分に把握することが必要となっている。

そこで、本研究では、①発達障害児を保育・教育する上で保育士・幼稚園教諭がどのような難しさを感じているのかを明らかにすること、②医療機関へ求める援助を明らかにすることを目的としたアンケート調査を実施した。この2つを明らかにした上で、発達障害児の統合保育・教育の現状を理解し、作業療法においてどのような援助が必要であるかを検討する。

対象

対象は、A市の発達障害児を受け入れている11か所の

1 鹿児島大学医学部保健学科作業療法学専攻臨床作業療法学講座

2 誠愛リハビリテーション病院

連絡先：井上 和博

〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/Fax : 099-275-6737 E-mail: inouc@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

保育園・幼稚園の保育士・幼稚園教諭31名であった。

方 法

1. 調査方法

調査方法は対象の保育士・幼稚園教諭に対し、統合保育・教育の現状や保育・教育を行う際の不安や困りごとに関する選択式および自由回答式のアンケートを郵送にて実施した。なお、実施にあたってはアンケートに添付した文書で研究の趣旨と方法・内容について説明をし、同意が得られた場合のみ無記名で回答してもらった。また、個人が特定されないことがないよう配慮した。

2. 調査内容

1) 統合保育・教育の現状

発達障害児の基礎情報については年齢、性別、診断名、所属クラスの人数、加配状況、発達障害児を受け入れる際の対応を回答してもらった。

2) 発達障害児を保育・教育する上での不安や困りごと

発達障害児の特徴を元に作成した30項目の質問(表1)に対して、まず「見られる」、「見られない」のいずれかを選択し、次に「見られる」と回答した項目については、「困っている」、「困っていない」のいずれかを選択してもらった。

3) 医療(療育)専門職との関わり

「これまでどの職種のどのような援助を受けたことがあるか」、「今後、どの職種のどのような援助を必要と考えるか」を回答してもらった。

分析は χ^2 検定を用いて行い、危険率5%未満を有意とした。

結 果

1. 統合保育・教育の現状

1) 発達障害児の基礎情報

保育士・幼稚園教諭が担当している発達障害児は3～6歳(平均年齢4歳8か月)、男児26名(84%)、女児5名(16%)の計31名であった。診断名は、発達遅滞7名(22%)が最も多く、ついで精神遅滞5名(16%)、広汎性発達障害5名(16%)、自閉症3名(10%)、注意欠陥多動性障害3名(10%)であった。診断が行われていない子どもや保育士・幼稚園教諭が診断名を知らない子どもは8名(26%)であった(表2)。

2) 発達障害児が所属するクラスについて

所属クラスの人数は、20人～24人が13クラス(42%)で最も多く、ついで15～19人が7クラス(23%)であった

表1 発達障害児を保育・教育する上での不安や困りごとに関する質問項目

質 問 項 目
1. 視線が合いにくい
2. 話す言葉が少ない
3. 名前を呼んでも気付かない
4. 相手からの話し言葉を理解できない
5. 表情の変化が少ない
6. お友だちが泣いたり、怒ったりしている様子が理解できない
7. 問いかけに対する返事がオウム返しである
8. お友だちのしていることに興味を持たない
9. 周りの状況を見て自発的に行動しようとしていない
10. 先生やお友だちと遊んだり、楽しんだりすることが少ない
11. よく動き回り、じっとしていない
12. 気に入った場所から離れない
13. ある特定のおもちゃや遊具、物の順序などにこだわる
14. 遊びのルールを守れない
15. 静かにしないといけないときに静かにできない
16. 遊びのときやご飯のときに集中できない
17. 行事がある時など、普段の流れと違うととまどう
18. 順番を待てない
19. 自分のしたいことができないときや嫌な事があったとき、パニック(かんしゃく)を起こすことが多い
20. 濡れたり、汚れたりすることを極端に嫌がる
21. 抱っこされたり、触られるのを極端に嫌がる
22. お友だちに危害を加えることがある
23. お友だちの物を勝手に取ってしまう
24. 一人で遊んでいるところに先生やお友だちが加わると嫌がる
25. みんなで移動したり、遊んだりすることが苦手である
26. お友だちができにくい
27. 偏食が多い
28. 年齢相応の運動が上手くできない
29. お箸やはさみが上手に使えない
30. 次の課題や遊びへの切り替えが上手くできない

表2 発達障害児の基礎情報

対象数	31人
男児: 女児	26: 5
年齢	人 (%)
3 歳	5 (16)
4 歳	7 (23)
5 歳	11 (35)
6 歳	8 (26)
平均年齢	4 歳8 か月
診断名	人 (%)
発達遅滞	7 (22)
精神遅滞	5 (16)
広汎性発達障害	5 (16)
自閉症	3 (10)
注意欠陥多動性障害	3 (10)
不明	8 (26)

(表3A)。保育士・幼稚園教諭の加配状況は、「特に加配していない」が18名(58%)で最も多かった。加配している場合には、「障害児1人に対して保育士・幼稚園教諭1人」が9名(29%)で大部分を占めていた(表3B)。

発達障害児を受け入れる際の対応では、「専門機関(病院や療育施設等)と連携をとる」が23名(74%)で最も多く、ついで「園外の研修会に参加する」が22名(71%)であった。「園内で研修会を開く」も17名(55%)と半数を超えていた。発達障害児を受け入れるにあたり、多くの園が何らかの対応をしている傾向がみられた(表3C)。

表3 幼稚園・保育園の発達障害児向けの態勢

A. 発達障害児が所属するクラスの人数	クラス数 (%)
10人未満	0 (0)
10人～14人	3 (10)
15人～19人	7 (23)
20人～24人	13 (42)
25人～29人	6 (19)
30人以上	2 (6)
合計	31 (100)
B. 保育士・幼稚園教諭の加配状況	人 (%)
特に配置していない	18 (58)
障害児1人に対して保育士・幼稚園教諭1人	9 (29)
障害児2人に対して保育士・幼稚園教諭1人	0 (0)
その他	1 (3)
無回答	3 (10)
合計	31 (100)
C. 発達障害児を受け入れる際の対応(複数回答可)	人 (%)
専門機関(病院や療育施設等)と連携をとる	23 (74)
園外の研修会に参加する	22 (71)
園内で研修会を開く	17 (55)
マニュアルを作る	0 (0)
特に何もしていない	0 (0)
その他	3 (10)
無回答	1 (3)

表4 統合保育・教育を行う上で配慮していること(複数回答可)

	人 (%)
発達障害児となるべく同じ目線で接する	22 (71)
発達障害児と話すとき、ゆっくりはっきり話すようにする	21 (68)
発達障害児の気持ちを出来る限り読み取る	21 (68)
発達障害児と他児との交流の場面を増やすようにする	16 (52)
発達障害児に保育・教育内容(課題等)を分かり易く説明する	14 (45)
食事やトイレ、着替えの場面で発達障害児に対してなるべく手伝うようにする	3 (10)
特になし	0 (0)
その他	0 (0)
無回答	1 (3)

統合保育・教育を行う上で配慮していることは「発達障害児となるべく同じ目線で接する」が22名(71%)、ついで「発達障害児と話するとき、ゆっくりはっきり話すようにする」と「発達障害児の気持ちを出来る限り読み取る」が21名(68%)、「発達障害児と他児との交流の場面を増やすようにする」が16名(52%)となっていた(表4)。

2. 発達障害児に見られる特徴、及び保育・教育する際の不安や困りごと

発達障害児に見られる特徴、及び保育・教育する際の不安や困りごとの割合を図1に示す。χ²検定の結果、発達障害児の特徴として有意に多くみられるのは「6. お友だちが泣いたり、怒ったりしている様子が上手く理解できない」が94%(χ²=23.5, df=1, p<.01), 「14. 遊びのルールを守れない」が87%(χ²=19.2, df=1, p<.01), 「9. 周りの状況を見て自発的に行動しようとならない」が84%(χ²=14.2, df=1, p<.01), 「16. 遊びのときやご飯のときに集中できない」が77%(χ²=9.3, df=1, p<.01), 「26. お友だちができにくい」が74%(χ²=8.5, df=1, p<.01)など30項目中12項目であった。

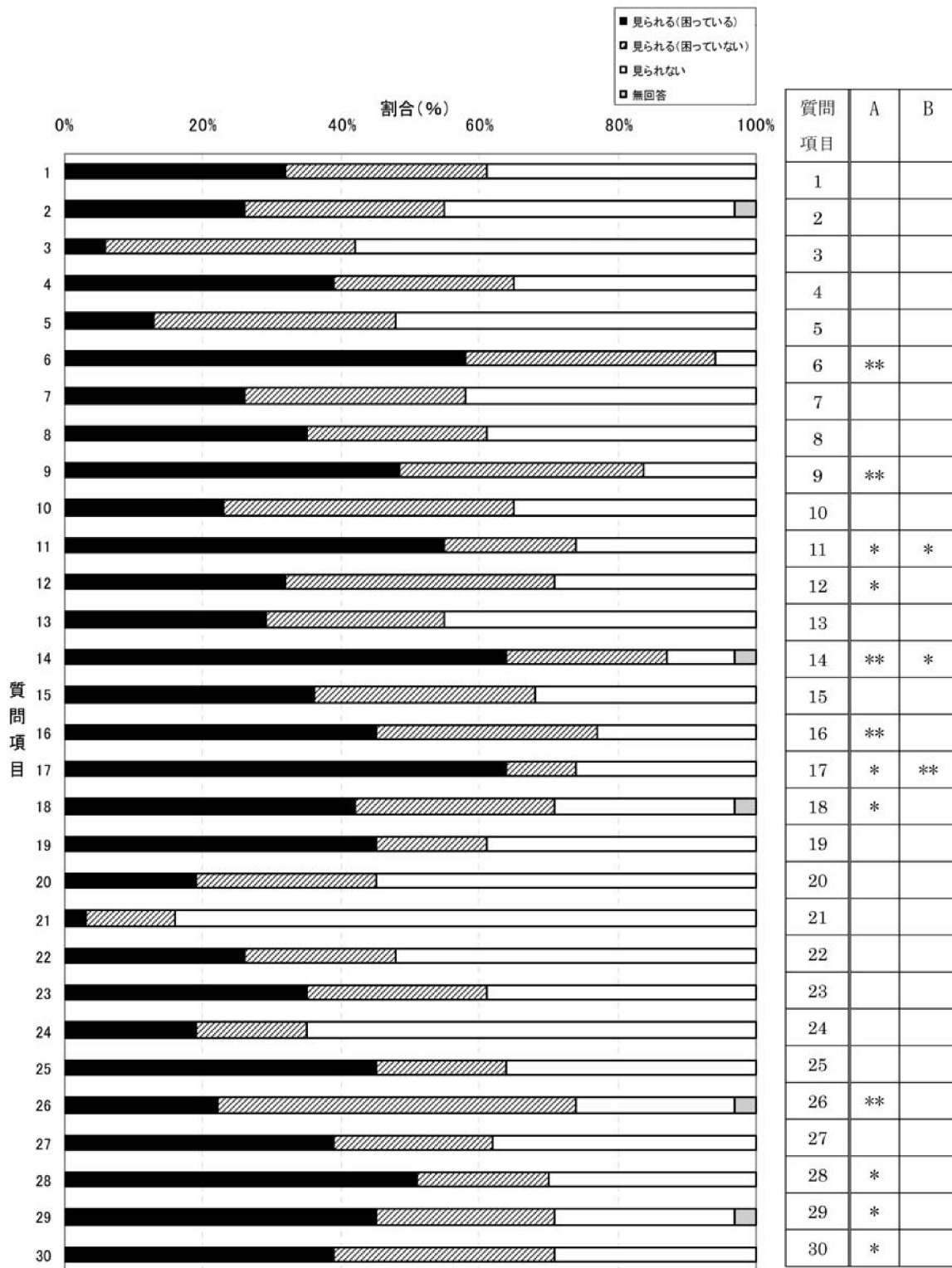
次に、特徴として見られるものの中で保育士・幼稚園教諭が不安や困っていることの割合を「不安や困りごと」の出現率として算出した(図1)。χ²検定の結果、出現率が有意に高かったのは12項目中3項目で、「17. 行事がある時など、普段の流れと違うととまどう」が86%(χ²=12.6, df=1, p<.01), 「14. 遊びのルールを守れない」が74%(χ²=6.3, df=1, p<.05), 「11. よく動き回り、じっとしていない」が74%(χ²=5.3, df=1, p<.05)であった。

次に、30の質問項目を『対人関係』、『コミュニケーション』、『回復常同的・執着行動』、『不適切な行動』、『集団適応』、『感覚異常と運動不器用を合わせた『その他』の6要素に分類してχ²検定を行った。その結果、出現率が有意に高かったのは『集団適応』67%(χ²=15.9, df=1, p<.01), 『不適切な行動』61%(χ²=4.8, df=1, p<.05)であった(図2)。

3. 医療(療育)専門職との関わり

これまで医療(療育)専門職の援助を受けたことがある保育士・幼稚園教諭は、25名で全体の80%であった。医療(療育)専門職の職種としては、心理士(発達相談員)が13名(52%)、その他として療育施設職員が12名(48%)であった。作業療法士に援助を受けたことのある保育士・幼稚園教諭はいなかった(表5A)。

援助内容では、「発達障害児とのコミュニケーションに関する指導」が24名(96%)でほぼ全員が回答していた。



(* : p<.05 ** : p<.01)

図1 発達障害児に見られる特徴、及び保育・教育する際の不安や困りごとの割合

右図のAは質問項目における「見られる」割合の有意差、Bは「困っている」割合の有意差を示す。

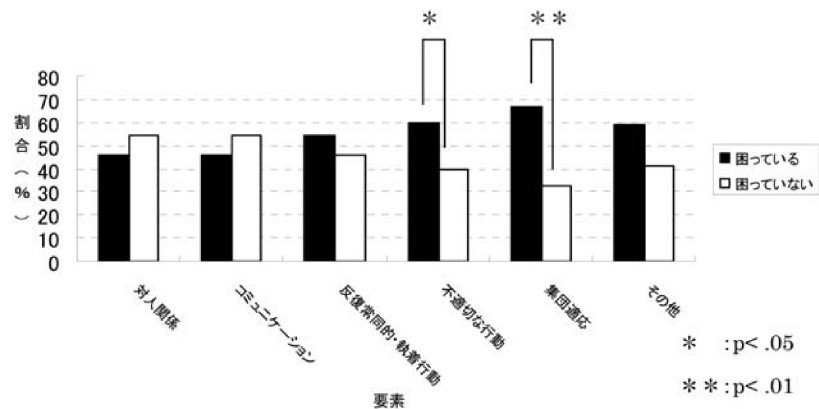


図2 要素別の不安・困りごと

ついて「発達障害児と健常児との集団保育・教育場面での指導」が18名(72%)であった。「医学的知識」について援助を受けたことがある保育士・幼稚園教諭はいなかった(表5B)。

今後、医療(療育)専門職の援助を必要と考えている保育士・幼稚園教諭は、28名で全体の90%であった。職種としては、心理士(発達相談員)が17名(61%)で最も多かった。ついで、作業療法士と言語聴覚士が5名(18%)であった(表6A)。

今後、必要と考える援助内容は、「発達障害児とのコミュニケーションに関する指導」が17名(61%)、「発達障害児と健常児との集団保育場面での指導」が16名(57

%),「発達障害児の保護者に対する指導および相談」が14名(50%)であった。「医学的知識」は3名(11%)が援助を必要と回答した(表6B)。

考察

1. 発達障害児を保育・教育する上での不安や困りごとについて

項目別の不安や困りごとの出現率、要素別の不安や困りごとの出現率において、『集団適応』、『不適切な行動』に関するものが困っている割合が高かった。また、発達障害児が所属するクラスの人数は20~25人が最も多く、クラス運営は保育士・幼稚園教諭1人で行っていること

表5 これまでの医療(療育)専門職の援助

A. これまでの医療(療育)専門職との関わり	人	(%)
ある	25	(80)
心理士(発達相談員)	13	(52)
医師	0	(0)
看護師	0	(0)
作業療法士	0	(0)
理学療法士	0	(0)
言語聴覚士	0	(0)
その他	12	(48)
ない	6	(20)
B. これまでに受けた援助内容(複数回答可)	人	(%)
発達障害児とのコミュニケーションに関する指導	24	(96)
発達障害児と健常児との集団保育・教育場面での指導	18	(72)
発達障害児の保護者に対する指導および相談	12	(48)
発達障害児の具体的な生活面(食事・排泄・更衣)での指導	8	(32)
医学的知識	0	(0)
その他	0	(0)

表6 今後の医療(療育)専門職の援助

A. 今後の医療(療育)専門職との関わり	人	(%)
必要ある	28	(90)
心理士(発達相談員)	17	(61)
作業療法士	5	(18)
言語聴覚士	5	(18)
理学療法士	4	(14)
医師	1	(4)
看護師	0	(0)
その他	3	(11)
必要ない	1	(3)
無回答	2	(7)
B. 今後必要と考える援助内容(複数回答可)	人	(%)
発達障害児とのコミュニケーションに関する指導	17	(61)
発達障害児と健常児との集団保育・教育場面での指導	16	(57)
発達障害児の保護者に対する指導および相談	14	(50)
医学的知識	3	(11)
発達障害児の具体的な生活面(食事・排泄・更衣)での指導	3	(11)
その他	2	(7)
無回答	4	(14)

が多かった。これらは、保育士・幼稚園教諭は、集団の運営が大きな役割を占めており、発達障害児個人の発達や生活に配慮しつつも、集団の視点が大きくなるため、集団へのスムーズな適応を妨げる特徴に対して困っているものと考えられる。

要素別の不安や困りごとの出現率において、『コミュニケーション』、『対人関係』は有意差がなかったにも関わらず、医療(療育)専門職に求める援助はコミュニケーションに関する内容が多い結果となった。これは、保育士・幼稚園教諭はコミュニケーションや対人関係についても困っているが、それよりも普段の統合保育・教育場面でのスムーズな集団適応ができず困っている場合と、集団への適応を促す接し方や関わり方が分からず、そのためコミュニケーション方法の援助を必要としているという場合が考えられる。

保育園・幼稚園は、保育士・幼稚園教諭と園児たちという「1対多」のコミュニケーションで集団行動をとる場面であり、「1対1」とは異なったコミュニケーション能力が要求される^{5,6)}。常田⁷⁾は、「1対多」のコミュニケーションに能動的に参加する要件として、①自分自身にだけ向けられた「ことば」ではない「ことば」に注目し理解できること、②保育士・幼稚園教諭に応答する場合には、自分自身がクラスの代表であることを理解すること、③友人が発言している場合には、自分自身の意見と同じであるのかという点についてモニターすることを挙げている。これらは、「1対1」のコミュニケーションとは違った要素である。発達障害児のコミュニケーションを促進するためには、人とやりとりすることの楽しさ、必要性に早く気付かせることが必要であり、そのためには「言葉かけや指示をわかりやすく伝えること」、「確実に受け取れる言語水準を確かめること」、「子どもが理解しているかどうかを確かめること」に注意して関わっていく必要があると考えられる。

2. 医療(療育)専門職との関わりについて

作業療法士に援助を求める保育士・幼稚園教諭が全体の18%という結果は、保育・教育の現場では発達障害児に対する作業療法の援助はあまり求められていないということを示していると思われる。このことは、療育施設や病院以外の場所では、PTとの違いが分からないとか、運動障害児に対する作業療法は理解できても、西村⁸⁾も述べているように発達障害児に対する必要性が理解されていないというのが現実であり、保育・教育の現場で作業療法そのものがよく知られていないことや、作業療法が発達障害児に対してどのような援助をするのか分からないということであると考えられる。また、これまで受けた援助内容、今後必要と考える援助内容ともに「医学

的知識」の割合は低かった。これは、発達障害児の問題点を臨床症状として見るのではなく、その子どもの個性の一つとしてみる保育士・幼稚園教諭の考え方が関係しているのではないかと思われる。

3. 保育園・幼稚園に通う発達障害児に対する作業療法士の関わりについて

幼児期の集団に求められることとして、①空間を共にすること：1つの集団としてそのクラスという同じ空間に居ること、②時間を共にすること：集団である特性から、一定の時間ごとに課題が流れていくこと、③対人関係：日々の生活の中には、保育士・幼稚園教諭やお友だちとのいろいろな接点があり、「大人のことばを理解し行動に移すこと」、「同じことをして楽しい気持ちを共有する」、「自分の気持ちを相手に伝える」、「相手のことばを聞き入れる」ことなどが必要であり、④行事への参加：運動会や発表会などのイベントを通して、物事に挑戦したり、頑張った後の達成感を味わったりすることや、順番を待つこと、息を合わせることなど数々の目に見えない課題が含まれている^{8,9)}。

よって、発達障害児が集団に適応するには、保育園・幼稚園という集団において「安心できる人を作る」、保育園・幼稚園という集団を「楽しい場所にする」、保育園・幼稚園の「日常の流れを理解する」ことが必要であると考える。そのために、作業療法士は、保育士・幼稚園教諭から集団場面での発達障害児の様子について情報を収集するとともに、治療的立場から発達障害児の特徴や具体的な集団適応の方法を伝えること、作業療法の仕事や援助内容の説明をしていくことが必要と考える。具体的な集団適応の方法としては、保育園・幼稚園を楽しむ場所とするため遊びを拡大すること、保育士・幼稚園教諭やお友だちとの対人関係を作るために、1対1の関係作りを重視することなどがある。

今後、作業療法士は、お互いがこのような情報を共有できるような関係を保育士・幼稚園教諭と築き、保育・教育の現場と連携を図り情報を共有することで、発達障害児の地域生活をよりよいものにするための一役を担うことができると考えられる。

文 献

- 1) 田村良子編：作業療法学全書 発達障害。第3版、協同医書出版、東京、2010、p12
- 2) France A, Alan AH, First BM. Diagnostic and Statistical Mental of Mental Disorders Fourth Edition 1994：高橋三郎、大野 裕、染矢俊幸(訳)：DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル。医学書院、東京、1996、p258-264

- 3) 高田谷久美子：統合保育の課題 1) 統合保育推進のための課題. 保健の科学1997 ; 39(10) : 679-683
- 4) 中島そのみ, 仙石泰仁：統合保育場面における障害児の相互交渉能力を視点にした行動評価の試み 精神遅滞を有する1症例を通して. 作業療法2005 ; 24(4) : 368-375
- 5) 中嶋理香：障害児統合保育現場での医療者支援—保育施設のアンケート調査をもとに—. 小児保健研究2002 ; 61(1) : 52-58
- 6) 内山千鶴子：統合保育における障害児への集団適応支援 言語聴覚士と幼稚園の連携. 小児の精神と神経2009 ; 49(1) : 53-60
- 7) 常田秀子：乳幼児保育と発達. 井上健治, 久保ゆかり編. 子どもの社会的発達. 東京大学出版, 東京, 1997, p70-88
- 8) 西村真喜子：幼児期(保育所・幼稚園)の生活と作業療法. 作業療法ジャーナル2003 ; 37(3) : 189-193
- 9) 石原詩子：幼児期を作業療法士が保育所・幼稚園で支える. 作業療法ジャーナル2009 ; 43(2) : 110-115

**“Anxiety and Annoyance” of nursery and kindergarten teachers involved
in the care of developmentally disabled children**
— From an occupational therapeutic point of view —

Kazuhiro Inoue¹, Naoko Kouchiyama²

1 Department of Clinical Occupational Therapy, School of Health Sciences,
Faculty of Medicine, Kagoshima University

2 Seiai Rehabilitation Hospital

Address correspondence to: Kazuhiro Inoue
8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima 890-8544, Japan
Tel/Fax: 099-275-6737
E-mail: inoue@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

The aim of the present study was to clarify what difficulties nursery and kindergarten teachers felt in integrative child-care and education of a developmentally disabled children, and to examine what assistance could be extended as an occupational therapist to assist their daily lives in a local community. We conducted a questionnaire survey on the current states and the anxiety and annoyance in integrative child-care and education for 31 nursery and kindergarten teachers in 11 nursery schools and kindergartens situated in the city A. As a result, it was found that nursery and kindergarten teachers had the feelings of annoyance related to the “group adaptation” and the “inappropriate behavior”, which was considered to be an annoyance toward the characteristic behavior hindering a smooth adaptation to a group, despite paying their due consideration to the development and life of developmentally disabled children. Therefore, it was suggested that it is important to gather the information on how the disabled children behave in their group activities from nursery and kindergarten teachers, and at the same time to advise them on the characteristics of such a disabled children as well as the concrete way for a group adaptation from an occupational therapeutic point of view.

Key words: developmentally disabled child, integrative child-care, annoyance, group adaptation, inappropriate behavior